

## 享保の飢饉

享保の飢饉は西南諸藩に被害をもたらしましたが、中でも松山藩の被害は甚大でした。藩から幕府への報告によると、藩内の餓死者は3,489人で全国の3分の1程を占めていました。享保の飢饉に関する愛媛県松山市と松前町の話をお伝えします。

### ■當郷餓死萬霊塔（愛媛県松山市）

松山地方では、享保17年（1732）5月から降り始めた雨が、麦の成熟・収穫期と重なって農作物に大きな影響を与えました。降雨は5月、6月、7月と続き、重信川や石手川などの河川の氾濫、田地の流失が繰り返されました。その上、日照時間の不足による低温、病害、虫害、特に南方より飛来した浮塵子（うんか）の異常発生で、稲が枯死し、収穫は皆無となり、多くの餓死者が出ました。松山市南高井の長善寺前には餓死した人々の霊を弔うために供養塔「當郷餓死萬霊塔」が建てられています。供養塔の標識によると、高井村（現松山市）では約半数の人々が餓死したとも伝えられています。＜久米郷土誌編集委員会編「久米郷土誌」1992年、神原健編「愛媛県気象史料」1952年、當郷餓死萬霊塔の標識（松山市教育委員会）＞



當郷餓死萬霊塔



當郷餓死萬霊塔の標識



### ■義農作兵衛（愛媛県松前町）

享保の飢饉により松山藩の中で最も被害が大きかったのは、筒井村（現松前町）を中心とする伊予郡でした。百姓はわずかに貯えた雑穀や草の根、海藻などで飢えをしのぎましたが、それも尽きると城下松山に出て袖乞いをするようにまでなりました。筒井村の作兵衛の家では享保17年（1732）6月に父が、8月に長男が餓死し、9月には作兵衛自らも過労と飢えのため麦の種播き中に昏倒しました。作兵衛の家には麦種子が1斗（約18リットル）残されていました。村人たちはこれを食用にして飢えをしのぐことを勧めましたが、作兵衛は、種子は農の基であり、自分一個人の生命にかえることはできぬと言い、麦種子の俵を枕に餓死しました。44歳でした。作兵衛の墓や銅像が建立されている義農神社では毎年4月に義農祭が行われています。＜松前町誌編集委員会編「松前町誌」1979年など＞



義農の墓



義農神社



(地理院地図に加筆)